

令和 2 年 5 月 15 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2015～2019

課題番号：15KT0005

研究課題名(和文)「老成学」の基盤構築—&lt;媒介的共助&gt;による持続可能社会をめざして

研究課題名(英文) Constructing the foundation of "Re-aging Gerontology": Towards the sustainable society by the multigenerational mutual help

研究代表者

森下 直貴 (MORISHITA, Naoki)

浜松医科大学・医学部・名誉教授

研究者番号：70200409

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、超高齢社会または人生100年時代に相応しい老人像を確立し、老人同士の互助や若者の育成によって持続可能となる社会を構想することである。具体的には、「老いの深まりの諸段階に応じた生き方」のモデルの設定を研究目標にしつつ、「仕事・活動」「コミュニティデザイン」「社会保障制度」「人生観・死生観」に考察を絞って理論的・実証的な研究を進めた。以上から、準備期(50代)、開始・展開期(60代・70代)、円熟・縮小期(80代)、死に方が問われる終末期、生者との語り合う死後の段階と、これらに応じた生き方が浮かび上がった。すべての段階を貫いているのは「尊敬に値する生き方」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

超高齢社会の日本では、老人と若者が対立するだけでなく、充実した日々を送る元気な老人と貧困や悲惨な介護に苦しむ老人とに老人世代が二極化しつつある。対立と分裂の背後には家族の自助力の地滑り的な衰退がある。「自助」や「公助」を補って「共助」を強化するために比較的元気な老人たちができることは何か。ここで必要とされるのは老人自身が生き方を意味づけるという主体的な観点である。この観点から老人像を捉え直すとき、同世代の老人同士による互助と若者世代に対する支援をめざす「コミュニティ形成」型の老人像が浮かび上がる。この老人像こそ超高齢社会の人生100年時代に求められる老人世代の生き方のモデルである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to establish a view of the elderly suitable for super-aged society or 100 years of life, and to envision a sustainable future society by the elderly helping each other and supporting young people. The research end point is the setting the model of "the way of living in various stages of aging". Specifically, we focused on "work/activity," "community design," "social security system," and "life and death view," and proceeded with theoretical and empirical investigation. From the above, we designed the model suitable for ways of living for five stages: (1) the preparation stage of 50s old, (2) the trial or expansion stage of 60s to 70s old, (3) the maturity or reduction stage of 80s old, (4) the terminal stage focusing on dying and (5) the post-mortem communication stage. What goes through all stages is the viewpoint of the "respectable elderly".

研究分野：倫理学、哲学、生命倫理学

キーワード：超高齢社会 人生100年時代 老い 生き方 コミュニティ形成 死に方 コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

超高齢社会を迎えた今日の日本では、年金や介護等をめぐって老人世代と若者世代が対立する構図が出現するとともに、老人世代自身も二極に分裂する傾向が生じている。充実した日々を送る元気な老人たちがいる一方で、貧困と悲惨な介護に苦しむ老人たちがいる。このような対立と分裂の背後には家族の自助力の地滑り的な衰退がある。衰退した「自助」や限定的な「公助」を補って「共助」を強化するために、比較的元気な老人たちにできることは何か。いま人生 100 年時代に相応しい老人の生き方が問われている。

その答えを探すときにネックとなるのが既存の老人像である。戦後の日本では長らく受動的な家族世話型が主流であったが、近年になって能動的な自己充実型が前面に出てきた(これを「アクティブ・エイジング」という)。ところが、自己充実型の老人であっても、さすがに 80 歳代のとりわけ半ば以降になると老人性疾患が進行する。そのためほとんどの老人が生きる意欲を喪失するようになる。現在、介護施設で世話を受けるのは完全受動型の老人であり、自宅で暮らすのは自己放棄型の老人である。

しかし、既存の老人学は現状の老人像を前提にし、これを問い直すことなく処置や対策を講じている。しかも、医学系と社会科学系の二つに分裂したまま統合されていない。これでは人生 100 年時代の老人の生き方に応えることはできない。

いま老人像に必要とされるのは、老人自身が生き方を不断に意味づけ直すという観点である。この観点を老人像に導入するとき、研究代表者の提唱する「老成学」が誕生する。「老成学」が構想する老人像において中軸となるのは、同世代の老人同士による互助ならびに若者世代に対する支援をめざす「コミュニティ形成」型の老人像である。この老人像こそ、超高齢社会の人生 100 年時代に求められる老人世代の生き方であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、超高齢社会における人生 100 年時代の老人世代に求められる新しい生き方を、老人同士の互助と若者への支援を中軸とする「コミュニティ形成」型の老人像と見定めつつ、それを具体化するための第一歩として、「老いの深まりに応じた生き方」のモデルを設定することである。将来、「コミュニティ形成」型の老人像が広く行き渡るならば、老人世代の役割を組み込んだ多世代の持続可能な社会が実現するであろう。

## 3. 研究の方法

研究方法の枠組みは、老いの現象の哲学的分析をふまえ、老いを構成する「働」「性」「病」「死」という四つの観点に注目しながら、研究の範囲を「仕事・活動」「コミュニティデザイン」「社会保障制度」「死生観」の四領域に絞るというものである。分担研究者を各領域に割り振って理論的・実証的な研究を進めた。

具体的な手法は、文献調査、国内外の関連施設の視察、インタビュー調査、フィールド調査、アンケート調査である。そのうち視察についてはドイツ・中国・タイ・英国の研究者と合同のセミナーをもち、情報と知見を交換した。また、最晩年期の高齢者に対するアンケート調査については、研究代表者の提唱するシステム倫理学の「四次元相関」思考を用い、これによって構築した QOL の概念枠組みに基づいて質問項目を設定した。

## 4. 研究成果

研究の成果の一つめは QOL 尺度の開発である。具体的には、システム倫理学の「四次元相関」の思考法を用いて「QOL」の概念枠組みを再構成し、この枠組みに基づいて「幸せ意識」と「生活満足度」と「生きがい」を統一的に捉える尺度を考案した。

二つめの成果は、最晩年期の老人の実態調査をふまえた提言である。80代～90代の老人の実態はこれまで研究上の空白であった。そこで QOL 尺度の検証を兼ねて、「新老人の会」のシニア会員約 2 千人を対象に大規模なアンケート調査を行った。着目したのは、年齢の階層区分を細かく工夫すること、仕事と活動の関係や人生の目標である。調査の分析から見えてきたのは、若い頃から仕事と活動の両面で充実した生き方をしてきた人は、80代になっても元気で活躍しているが、それでもさすがに 87 歳あたりになると、老いの質が変化して仕事・活動を縮小せ

ざるをえなくなることである。以上をふまえ、「新老人の会」の持つバイアスを考慮しつつ（会員は一般の老人に比べるときわめて積極的である）、高齢者の前期後期の線引きを80歳に引き上げることが提言した。

三つめは、終末期の安楽死問題に関して老成学の見地から実践的な提案をしたことである。80代の後半ともなると、老いの焦点はそれまでの生き方から死に方に変わる。現在、終末期の死に方に関して「尊厳死」を含む広義の「安楽死」が人々の関心を呼んでいる。老いが深まると終末期に至ることから、この段階を生き方の延長線上に位置づけておく必要がある。そこで広義の「安楽死」問題を集中的に考察し、老人に限ってそれを選択肢の一つとして許容する条件として、家族の話し合いとともに、かかりつけ医を含む専門家チームによる厳格な審査が必要であるという結論に至った（このテーマに関連する著書は2020年9月に刊行される予定である）。

四つめは、死後のコミュニケーション（語らい）の重要性を指摘した点である。老いの深まりの諸段階のうち、終末期は最後ではなく、終末期に続いて死後の段階がくる。死後においても生者とつながっているという希望は、最晩年期の老人がコミュニティを形成し維持するため上で励ましとなる。人生後半の50年の生き方は、人生前半の50年の生き方の延長線上にあるだけでなく、誕生の前から死んだ後までをつらぬく世代を超える営みの一環である。この視点は老成学にとって決定的に重要である。

以上の成果やその他のアイデアを土台にして、人生後半50年の「老いの深まりの諸段階に応じた生き方」のモデルを設定することができた。これは次の五段階からなる。すべての段階を貫いているのは、同世代の互助と若者世代の育成を志向する「尊敬に値する生き方」である。

- 社会の多様な領域に広がる仕事・活動のために準備する段階（50代）
- 社会の多様な領域に広がる仕事・活動の開始から展開の段階（60代～70代）
- 社会の多様な領域に広がる仕事・活動の円熟から縮小の段階（80代～）
- それまでの生き方から死に方へと関心の変容する終末の段階
- 死者と生者の間でコミュニケーションがつながる死後の段階

このモデル設定をもって本研究の目的はひとまず達成された。もちろん、老成学と東アジアの思想伝統（孝）との関連、老人の性、コミュニティデザイン、それにポスト・コロナ時代の社会制度における高齢者の位置づけなど、老成学にとって重要なテーマがなお論じ残されている。これらのテーマの研究を含めて上記のモデルを肉付けすることが、老成学の次なる研究目標である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 Tsuruwaka Mari	4. 巻 8(10)
2. 論文標題 Educational challenges in teaching nursing ethics: perspectives of educators in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of nursing education and practice	6. 最初と最後の頁 152- 164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.5430/jnep.v8n10p152.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大林雅之	4. 巻 15号
2. 論文標題 小さな死生学序説 「小さな死」から「大きな死」へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋英和大学院紀要	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村岡潔	4. 巻 13号
2. 論文標題 医師の裁量権と患者の自己決定権 (3) 違法性阻却とインフォームド・コンセント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佛教大学保健医療技術学部論集	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井口高志	4. 巻 29 (2)
2. 論文標題 認知症ケアにおける地域の意義 認知症の人の一貫性の維持と緩和に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 268巻11号 ~ 265巻3号
2. 論文標題 医療社会学の冒険1-11	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 245-9 ~ 958-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松田正己	4. 巻 29-2
2. 論文標題 世界の健康改善に及ぼす国際環境力の作用 アルマ・アガ宣言から40年間の意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 J.Seizon and life Sci.	6. 最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下直貴、中塚晶博	4. 巻 28-2
2. 論文標題 「QOL」を哲学する 生存・生活・人生の<構造>	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生存科学 (J. Seizon and Life Sci.)	6. 最初と最後の頁 103-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 28-2
2. 論文標題 DSM的理性とその不満	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 54-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tsuruwaka Mari	4. 巻 16 (23)
2. 論文標題 Consulted ethical problems of clinical nursing practice: perspective of faculty members in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BMC Nursing	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12912-017-0217-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井口高志、森口弘美、太田啓子、松本理沙	4. 巻 123
2. 論文標題 調査活動『みんなが行きたくなくなるカフェってどんなカフェ?』: インクルーシブリサーチの観点からの検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 評論・社会科学	6. 最初と最後の頁 83-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村岡 潔	4. 巻 12
2. 論文標題 医師の裁量権と患者の自己決定権(2) - 医師の作法と真実告知あるいはパレーションの倫理をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佛教大学保健医療技術学部論集	6. 最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大林雅之	4. 巻 2018年号
2. 論文標題 死に向かう生と性 高齢者はいかに生きるか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報2018』	6. 最初と最後の頁 103-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naoki Morishita	4. 巻 27 (4)
2. 論文標題 Bioethics Diversity and a possible "Global Bioethics": Reflections from the social systemic perspective.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Bioethics and Ethics of Science Reprinted from Fritz JAHR (1895-1953) From the Origin of Bioethics to Integrative bioethics.	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森下直貴	4. 巻 13
2. 論文標題 < 垂直のコミュニケーション > という希望 最晩年期における「老の中の死」の意味	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 死生学年報2017 (東洋英和女学院大学死生学研究所)	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gordana Pelcic, Silvana Karacic, G.L.Mikirtichian, Olga I. Kubar, Frank J. Leavitt, Michael Cheng-tek Tai, Morishita Naoki, Suzana Vuletic, Luka Tomasevic	4. 巻 57
2. 論文標題 Religious exception for vaccination or religious excuses for avoiding vaccination	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Croatian medical Journal	6. 最初と最後の頁 516-521
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 森下直貴	4. 巻 27-1
2. 論文標題 < デジタル化 > とその倫理問題 科学技術倫理学の四つの基本課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 生存科学 (生存科学研究所)	6. 最初と最後の頁 107-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 別所良美	4. 巻 19
2. 論文標題 ベーシック・インカムから考える少子高齢化社会	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ジェンダー研究(東海ジェンダー研究所)	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大林雅之	4. 巻 なし
2. 論文標題 二つの「小さな死」- その邂逅の軌跡	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第21回日本臨床死生学会記録『サイエンスとアートとして考える生と死のケア』(エム・シー・ミュージズ)	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大林雅之	4. 巻 13
2. 論文標題 老いにおける性と死	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 死生学年報2017(東洋英和女学院大学死生学研究所)	6. 最初と最後の頁 103-121
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakajima, Y., Tanaka, N., Mima, T., Izumi, S.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Stress Recovery Effects of High- and Low-Frequency Amplified Music on Heart Rate Variability	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Behavioural Neurology	6. 最初と最後の頁 8 pages
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.1155/2016/5965894	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 稲垣恵一	4. 巻 14
2. 論文標題 個人の平等の二律背反 ジェンダー研究のひとつの哲学的基礎づけ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院文学研究科哲学研究室編『哲学フォーラム』	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下直貴	4. 巻 30
2. 論文標題 <老成学>の構想－老人世代の「社会的再関与」によるコミュニティ再生への展望	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 浜松医科大学(一般教育)紀要	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naoki Morishita	4. 巻 15&16
2. 論文標題 A View of Risk from the Perspective of Ethics	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Formosan Journal of Medical Humanities	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 鶴若麻理、森下直貴	4. 巻 30-2
2. 論文標題 日本における最晩年期高齢者の<生き方>の一側面 「新老人の会」の調査を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生存科学	6. 最初と最後の頁 69-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計46件（うち招待講演 18件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 不正とリスクをめぐる研究倫理 老成学からの提案
3. 学会等名 大学共同利用機関法人・自然科学機構核融合科学研究所NIFS 倫理講習会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoki Morishita
2. 発表標題 The structure of QOL: A philosophical proposal for making scales.
3. 学会等名 The XV Annual Conference of ISCB, Barcelona（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 「QOL」の構造 尺度作りのための提案
3. 学会等名 第37回日本医学哲学・倫理学会大会（北海道大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 倫理の学び
3. 学会等名 京都大学・みえむ未来創生フォーラム（三重県総合博物館）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 高齢者の<老い方=生き方>モデルを考える 老成学によるアンケート調査から
3. 学会等名 第30回日本生命倫理学会年次大会(京都府立医科大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naoki Morishita
2. 発表標題 "Tama-shii" as the <structuring> of systems: Life and death in humans, animals and robots.
3. 学会等名 The 3rd Kyoto Workshop on Evolutionary Thanatology (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴若麻理、池口佳子、中村めぐみ
2. 発表標題 急性期病院でのアドバンス・ケア・プランニングの実践 医師・看護師が高齢患者へ意向確認するタイミングの分析を通して
3. 学会等名 第30回日本生命倫理学会年次大会(京都府立医科大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴若麻理
2. 発表標題 最晩年期の高齢者の生き方に関する調査から高齢者の<老い方=生き方>のモデルを考える
3. 学会等名 第30回日本生命倫理学会年次大会(京都府立医科大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蘭牟田洋美
2. 発表標題 エイジレス就労の実態から高齢者の<老い方=生き方>モデルを考える
3. 学会等名 日本生命倫理学会第30回年次大会（京都府立医科大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masahiro Nakatsuka
2. 発表標題 The “procedural justice” as a principle of medical ethics
3. 学会等名 15th Annual Conference of International Society for Clinical Bioethics (ISCB), Barcelona (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中塚晶博
2. 発表標題 心の故郷に暮らす人々 認知症者の幸福についての考察
3. 学会等名 第5回釧路生命倫理フォーラム北海道・釧路市)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 「高齢者介護」から「養老」へ----老成学からの提唱
3. 学会等名 第22回一橋哲学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 QOL概念の基本構造----四極フレームによる再構成
3. 学会等名 第4回釧路生命倫理フォーラム(企画)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 ポスト生殖時代の性と愛：老成学の視点から人間的魅力と性的魅力を考える
3. 学会等名 第4回釧路生命倫理フォーラム(主催)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 東アジア形而上学と<垂直のコミュニケーション>
3. 学会等名 第4回日中学術シンポジウム：超高齢社会における東アジア形而上学の可能性(主催)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoki MORISHITA, Masami MATSUDA
2. 発表標題 The Meaning of Life and Death in the most elderly people : Re-Aging Gerontology and Vertical Communication.
3. 学会等名 18thNursing Ethics & 3rdEthics in Care Conference(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 高齢化と現代日本
3. 学会等名 インドネシア大学日本学科ワークショップ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中塚晶博
2. 発表標題 認知症者の、病理としての妄想、語りとしての妄想
3. 学会等名 International Workshop Challenges of Illness Narratives（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鶴若麻理・大桃美穂
2. 発表標題 独居高齢者のAdvance care planningのプロセスと具体的支援：訪問看護師が高齢者へ意向確認するタイミングの分析を通して
3. 学会等名 第29回日本生命倫理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井口高志
2. 発表標題 「新しい認知症ケア」が家族介護にもたらすもの あるデイサービスの本人の「思い」の聞き取り実践を事例に考える
3. 学会等名 第22回一橋哲学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村岡 潔
2. 発表標題 ケアにおける「SOL 倫理とQOL 倫理」再考 医学は人間の生命の価値をはかれるのか？
3. 学会等名 第36回日本医学哲学・倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 蘭牟田洋美
2. 発表標題 企業における“生涯現役”社会構築の条件と支援 - 仕事での遊び・フロー体験・居場所感と生涯現役との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 老人世代の働き方 老成学の視点から
3. 学会等名 死生学研究所・連続講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 <老成学>の試み：コミュニティ関与型老人観の提唱
3. 学会等名 第28回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大林雅之
2. 発表標題 老いにおける性と死
3. 学会等名 死生学研究所・連続講座
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大林雅之
2. 発表標題 老人の性と老成学
3. 学会等名 第28回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松田正巳
2. 発表標題 老成学の視点と結核予防婦人会の活動の歴史・変化
3. 学会等名 第28回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中塚晶博
2. 発表標題 認知症診療場面で発生する倫理的諸問題について
3. 学会等名 第28回日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 中塚晶博
2. 発表標題 長寿時代の医療倫理学
3. 学会等名 第3回「釧路国際生命倫理サマースクール&ラウンドテーブル
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中塚晶博
2. 発表標題 認知症ケアを問い直す：人間らしくある - コミュニチュード - ということ
3. 学会等名 自助・互助強化プログラム開発プロジェクト『くらしの学び庵』シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 ヒト脳刺激・可塑性・学習
3. 学会等名 第10回日本作業療法研究学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井口高志
2. 発表標題 認知症の「本人」の登場はいかになされ、何をもたらすのか？
3. 学会等名 第89回日本社会学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井口高志
2. 発表標題 認知症ケアにおける家族と生活の質
3. 学会等名 第9回福祉社会科学講座（大分大学大学院福祉社会学研究科）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲垣恵一
2. 発表標題 在監者と老成学
3. 学会等名 アレント研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 稲垣恵一
2. 発表標題 LGBTと老成学
3. 学会等名 アレント研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 老成学の構想
3. 学会等名 釧路生命倫理セミナー（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Naoki Morishita
2. 発表標題 On the digital medicalization
3. 学会等名 International Society of Clinical Bioethics (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 老成学の構想
3. 学会等名 フィールド医学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 老成学の構想
3. 学会等名 名古屋哲学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 老成学の構想
3. 学会等名 老成学学術シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 三木は「西田哲学」を超えることができたか
3. 学会等名 名古屋哲学研究会日本思想史部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 QOL概念を哲学する <四次元相関> 思考のススメ
3. 学会等名 東京大学大学院医療倫理学研究室セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 システム倫理学とシステム理論 <世代性> を組み込んだ互助集団は可能か？
3. 学会等名 2019年度名哲研・東京唯研合同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 Paradigm Shift from how to die to how to live The concept of the euthanasia problem in the elderly
3. 学会等名 ISCB /Krakow, Poland/October 3-4 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 超・超高齢社会を生きる 老成学の挑戦
3. 学会等名 南禅寺・南陽院茶話会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下直貴
2. 発表標題 QOL尺度の作成と評価 哲学的方法論の提案
3. 学会等名 京都府立医大AMED研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 牧野英二ほか編、森下直貴：第6章（人はなぜ「四区分」するのか - 認識・行為・コミュニケーションの構造、93-115ページ）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 288+
3. 書名 知の越境と哲学の変換	

1. 著者名 藤田正勝ほか編、森下直貴：第7章（三木は「西田哲学」を超えることができたか コミュニケーションの<構造化>という視点、111-126ページ）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 281
3. 書名 再考 三木清 現代への問いとして	

1. 著者名 鶴若麻理、長瀬雅子（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 131
3. 書名 看護師の倫理調整力	

1. 著者名 大林雅之	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 81
3. 書名 小さな死生学入門 小さな死・性・ユマニチュード	

1. 著者名 Kenichi Meguro(ed.), Masahiro Nakatsuka: Chapter 1(Dignity and QOL)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Nova Science Publishers	5. 総ページ数 126
3. 書名 Human Security: Social Support for the Health of the Aging Population Based On Geriatric Behavioral Neurology	

1. 著者名 井口高志、土屋葉、岩永理恵、田宮遊子（共編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 生活書院	5. 総ページ数 257
3. 書名 被災経験の聴き取りから考える：東日本大震災後の日常生活と公的支援	

1. 著者名 松田正己・江口 晶子編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 公益社団法人全国結核予防婦人団体連絡協議会	5. 総ページ数 280
3. 書名 結核予防婦人会第3回全国実態調査報告書（非売品）	

1. 著者名 大林雅之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 230
3. 書名 生命の問い 生命倫理学と死生学の間で	

1. 著者名 Naoki Morishita, Chapter10 (145-161), Bioethics Diversity and a possible "Global Bioethics": Reflections from the social systemic perspective	4. 発行年 2016年
2. 出版社 MA Editions-ESKA, Paris	5. 総ページ数 298
3. 書名 Christian Byk and Hans-Martin Sass (eds.), Fritz JAHR (1895-1953) From the Origin of Bioethics to Integrative bioethics	

1. 著者名 美馬達哉、第2章（34 - 61頁）：精神医療のバイオポリティクス	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 272
3. 書名 石原孝二・河野哲也・向谷地生良編『シリーズ精神医学の哲学3 精神医学と当事者』	

1. 著者名 森下直貴 (編著)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 262
3. 書名 生命と科学技術の倫理学	

1. 著者名 美馬達哉	4. 発行年 2015年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 246
3. 書名 生を治める術としての近代医療－フーコー『監獄の誕生』を読み直す	

1. 著者名 森下直貴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 幻冬舎ルネッサンス新社	5. 総ページ数 265
3. 書名 システム倫理的思考 対立しながらも、つながり合う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

老成学研究所 <a href="https://re-ageing.jp">https://re-ageing.jp</a> システム倫理学研究センター
--



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松田 正己  (Matsuda Masami)  (90295551)	東京家政学院大学・現代生活学部・教授    (32648)	
研究分担者	美馬 達哉  (Mima Tatsuya)  (20324618)	立命館大学・先端総合学術研究科・教授    (34315)	
研究分担者	中塚 晶博  (Nakatsuka Masahiro)  (20597801)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・その他    (14301)	
研究分担者	井口 高志  (Iguchi Takashi)  (40432025)	奈良女子大学・生活環境科学系・准教授    (14602)	
研究分担者	鶴若 麻理  (Tsuruwaka Mari)  (90386665)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授    (32633)	
研究分担者	村岡 潔  (Muraoka Kiyoshi)  (10309081)	佛教大学・社会福祉学部・教授    (34314)	
研究分担者	蘭牟田 洋美  (Imuta Hiromi)  (60250916)	首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授    (22604)	